

サッカーにおける選手育成年代の比較—日本とサッカー強国の相違点に着目して—

Comparison of young generation in football -Focusing on the difference between Japan and football powers-

1K04B036-8

大場 優

指導教員

主査 堀野博幸先生

副査 石井昌幸先生

序論

1990 年代以降、サッカー日本代表は目覚ましい活躍を成し遂げてきた。ワールドカップに一度も出場経験がなかった日本代表は1998年に初出場を果たし、2002年、2006年と3大会連続出場している状況である。またユース年代の活躍も見逃すわけにはいかない。例えば、1999年のU-19ワールドユース選手権では準優勝、U-23日本代表は2000年のシドニーオリンピックでベスト8に輝いている。これらの成果は、Jリーグ発足によりサッカー人気上昇、サッカー人口が増加したことによるものであると考えられる。また日本サッカー協会(以下 JFA)の育成年代への熱心な取り組みもこれらの成果につながったといえる。しかしながら、成長し続けてきた日本サッカーも近年成長が停滞してしまったといえる。1999年準優勝、2000年ベスト8を経験したメンバー主体で挑んだ昨年のドイツワールドカップは1勝もすることなく予選で敗退してしまった。ユース年代では海外と互角に戦うことができるのに、なぜフル代表になると勝てなくなってしまうのであろうか。その原因はユース年代の育成事情にあると考えられる。本研究では、日本と海外のユース年代におけるサッカー事情を調査し、共通点、相違点を見つけ出すこととする。

方法・対象

過去の先行研究や資料を用いて日本と海外のユース年代におけるサッカー事情を調査し、得られた結果に基づいて考察するものとする。また、対象国はフランス、スペイン、イタリア、スウェーデン、ポルトガル、ブラジル、アメリカ、日本、以上8カ国とする。

結果

海外のほとんどの国において、ほとんどの選手はクラブチームに所属していた。2〜3歳ごとのカテゴリーに分類され各カテゴリーの選手人数は20人前後という少数であった。U-8、U-10、U-12年代における試合形式は5対5や7対7といった少人数制でコートは小さめであった。どのカテゴリーにおいても公式戦は1年を通して行うリーグ戦が主体であった。トーナメント方式の大会も存在したが重要度はあまり高くなく、

あくまでリーグ戦が重視されていた。

一方、キャプテンズ・ミッションを中心とした JFA の推進は海外と同水準のコンセプトを示していた。日本のユース年代における選手は、4種(小学生)、3種(中学生)、2種(高校生)という主に3つのカテゴリーに分類されている。海外とは異なり、日本のユース年代における選手はクラブに所属する選手よりも、各学校のサッカー部に所属する選手の方が圧倒的に多かった。また1チームあたりの平均選手数は約30人となっており、海外と比べると多かった。公式戦も海外とは異なり、トーナメント方式がほとんどであった。

考察

海外、日本共に選手の発育発達を考慮した選手育成を行おうとしており、この点においてはあまり差がないと考えられる。つまり、発育発達を考慮した選手育成はもはや常識となっている。海外と日本で決定的に違うのは、海外選手の方が毎週末、あるいは定期的に公式戦をこなしていることと、年間で多くの試合をこなしていることである。毎週末のように試合がある方が、試合を意識して練習を行うことができるであろう。よって海外選手の方が日本選手より効果的な練習を行っていると考えられる。以上のように、ユース年代により多くの公式戦を毎週末こなした結果、また、より効果的な練習を行った結果、海外選手は20歳以降も日本人選手より成長し、力の差が開くと推察される。

日本でもリーグ戦を重視した大会は増えつつあるが、未だ毎週末公式戦を行える環境は整っていない。リーグ戦方式の大会を、どの年代においても増加させていく必要があるだろう。また、日本は学校の部活動中心であるため、選手が自分の意志でチームを選ぶことができないといえる。今後、部活動から「総合型地域スポーツクラブ」へ移行し、充実した環境を作っていく必要があるだろう。

今現在のユース選手たちが、充実した環境で練習を行い、また、公式戦を多くこなし、経験をつむことによって世界と対等に戦う力を身につけるのではないだろうか。